

比較の中の国家表象（「日本」「天皇」「国体」）

中田喜万

二〇二一年度前期に予定された公開授業は、前年度と同様、コロナ禍のため学外への公開が認められず、しかも東京女子大学の正規の学生向けの授業も遠隔のみで行うことを余儀なくされた。一年後の現在二〇二二年三月の時点またはそれ以後から顧みると、どのみち遠隔授業にするならば広く公開してもよかつたのではないか、という疑問が生じるかもしれない。事実、某カルチャースタールの類では今やオンライン講座が主流となってきたらしいから。しかしそんな疑問は後知恵というもので、一年前は未知の要素も多く、まだコロナ禍の終息を見通せず、大学関係を含む多くの人々が神経をとがらせて感染拡大防止対策に頭を悩ませていたのであった。後から検証すれば滑稽なほど見当違いややり過ぎの対策も多々指摘できることだろうが、真偽のいりまじった錯綜する情報と、監督官庁（ここでは文部科学省）から降ってくる雨あられのような大量の通達の中を人々がいかに過ごしたか、いつか当事者自身も忘却してしまうかもしれないので、その当事者の一人として、弁解がてら書き記しておく。

ともあれ、オンライン化が一挙に進んだ。新しい器にはそれに適した内容が考えられるべきで、遠隔で学ぶ学生・視聴者を飽きさせない工夫が必要になるだろう。PC画面ごしであることを活かした色鮮やかな写真とか、見ごたえある映像とか、そういう演出も大事になるかもしれない。しかしながら弁解ついでにいえば、一見さんにも魅力的なコンテンツを用意できるかは、授業科目によって事情が大いに異なる。「比較思想」を見せもののようにするのはどうしても難しい。また授業を準備する方は、通常業務を抱えながらの一人である（これは私は、放送教材づくりのスタッフの支援を受けられずに孤独に編集作業するという意味で、「ひとり放送大学」と呼んでいた。自分の鼻詰まり声を聞き返しながらか、言いよどみ・滑舌の悪さを一つ一つ修正していった）。教員の個人差はあろうが、総じて満足できる教材に仕上げられるには、コロナ禍の後もオンライン化の遺産が続くとして、試行錯誤のため数年間かかるのではないだろうか。

そういうわけで、コロナ禍の前からあまり変わり映えしない授業を、

教員本人もどかしく感じながら、一学期間、毎週配信し続けた記録が以下のとおりである。

「公表されたシラバスの抜粋」

○授業内容

国家という抽象的存在が、ある種の理論の説くように想像の産物であり幻想であるとして、それに存在感を与えてきた表象は何であったか。そんな問いを、日本を中心に諸外国の事例と比較しながら考えます。国家そのものを対象とするのは到底困難ながらも、その尻尾をつかまえることが、表象（記号・象徴・標章）をたどること、いくばくか可能になると期待されるわけです。

我々が思う（といっても個々人、性別、世代によって異なるところがまた面白い）ところの「日本的」（あるいは「和風」）なものと、あるいは「日本」という言葉それ自体、「日の丸」や「君が代」、暦・元号・祝日といった時間の規定、国土（島国）のイメージ、「国民」や「民族」の定義、「国語」「国文学」「国史」のあり方など、話題が広がりますが、講義時間の許す限りで取り扱います。

講義の後半は、国家と国民統合の象徴としての「天皇」の概念史、また後期水戸学以降の「国体」の政治思想史となります。

○スケジュール

第1回 序説…3つのナショナリズム理論（ベネディクト・アンダー

ソン、エリック・ホブズボーム、アーネスト・ゲルナー）。「日本的」であること、附・「東洋」とは（和風と洋式、そして中華の相対化。身近な問題から考える）。

第3回 「桜」と近代日本…ソメイヨシノをめぐって（近代国家の発展をことごとく舞台装置。日露戦争記念）。

第4回 「山桜」への憧憬…伝統の創造（本居宣長など）。

第5回 「開国」「国民」「国粋」（文明開化、欧化政策とその反動。国際化するほど問われる「国民性」論）。

第6回 「国民」とは誰か…国籍と戸籍 附・住民票（二重国籍の問題。無戸籍者の問題）。

第7回 日本「民族」の虚構 附・日本列島のイメージ（単一民族神話の起源。植民地主義。差別問題。逆さ日本地図。富士山）。

第8回 「国語」「国文学」の思想史（契沖、賀茂真淵、本居宣長）。

第9回 「日本」という国号（遣唐使から国際法まで）。

第10回 「日の丸」「君が代」…比較の中の国旗と国歌。

第11回 暦・元号・祝日（旧暦から新暦へ。旗日。「忠君愛国」行事の演出）。

第12回 「国体」と「万世一系」（後期水戸学。天皇系図の変遷をめぐって。南北朝正閏問題）。

第13回 「天皇」号の歴史的展開（津田左右吉。公家と仏門。「院」号）。

第14回 「天皇」制度の近代的編成（光格天皇以降、幕末の天皇。大日本帝国憲法へ）。

日本のナショナリズムの暴走を制御することが、日本政治思想史学の目的の一つであると私は考えているので、あえて自分の研究課題から逸脱した授業にも手を抜けることにしている。しかし同学の人がこのシラバスを見れば容易にお察しのとおり、もとより羊頭狗肉となることが必至の内容であった。前半は主に、普段身近にありながら立ちどまって考えることのない、国家に関わる記号象徴の社会文化史や制度の変遷を、外国の事例と適宜比較しながら語ることにした。その分には、誰しも気安く視聴してくれるだろうと思われる。しかし後半になると、どうしても古文・漢文の史料の読解をとまなう。対面の教室で授業する際には、聴講生の顔に浮かぶ「？」マークを感じとりながら、そのつど平易な説明を付け足していくものであるが、そういう塩梅をしないまま進めてしまったから、きつと最後のあたりは、日本史や日本文学を専攻する学生以外は置いてきぼりにしてしまったのではないかと、とおそれる。教養科目という位置づけで、専攻・学年の様々な学生が集まってくれたこともあり、対応が難しい。

履修してくれた学生は、六四名（うち単位取得者は五八名）であった。双方向のやりとりのため（これも通達で要請されている）、WebClass上に掲示板を設けたところ、毎回多くの学生が意欲的に投稿してくれた。実は類似の授業をわが本務校でも試みたのであるが、それよりも格段にすぐれて反応してくれたのは、東京女子大学の学生の気風がオンラインでも活かしているからだろう。教材にそって母親と語り、二世代にわたる学校教育での「日の丸」の取扱いについて感

想を述べてくれたり、これまでに出会った、日本で暮らす外国籍の友人の境遇のことを想起してくれたりした。ほんの僅かでも知的刺戟になったならば、と思う。

学期末試験に代替するレポート課題では、

東京オリンピック（二度目）の開催にちなんで、

・一九六八年のメキシコ五輪において、陸上男子の表彰式・国旗掲揚の場で人種差別に抗議する政治的意思表示をした選手たちについて
・一九三六年のベルリン五輪において、日本人として男子マラソンの金メダルを授与された朝鮮半島出身の選手について

また時事に関連して、

・「女性天皇」と「女系天皇」

などのテーマを出題した。自由な考察を認めた。一方的な価値観をふりまわすのでなく多面的に配慮する答案であれば、解答者本人の立場の如何にかかわらず高く評価した。